一般社団法人

# 日本ＬＤ学会 第23回大会

## ＜プログラム・発表論文集＞

イラスト　高本　友里

**大会テーマ**

## より効果的な支援をめざして

### 学習支援から問う特別支援教育

期 日／ 2014年11月23日(日)・24日(月)

会 場／ 大阪国際会議場（グランキューブ大阪）

主 催／ 国立大学法人　和歌山大学　　共 催／ S.E.N.S の会支部会（和歌山・大阪・京都・滋賀・奈良・兵庫）

## 自主シンポジウム ≪ J55 ≫

【会 場】NCB 月

**2014 年 11 月 24 日（月・祝） 15：45～17：15**

### 発達障害に特化した民間クリニックの LD への取り組みと提言
～ 早期発見とその後の“支え”を中心に ～

| | | |
|---|---|---|
| 企画者 | 藤岡 徹 | 福井大学 |
| 司会者 | 藤岡 徹 | 福井大学 |
| 話題提供者 | 石坂 郁代 | 北里大学 |
| 話題提供者 | 河野 俊寛 | 金沢星稜大学 |
| 話題提供者 | 伊藤 一美 | 星槎大学大学院 |
| 話題提供者 | 山口 大輔 | 平谷こども発達ｸﾘﾆｯｸ |
| 指定討論者 | 平谷 美智夫 | 平谷こども発達ｸﾘﾆｯｸ |

## 自主シンポジウム ≪ J56 ≫

【会 場】NCB 雪

**2014 年 11 月 24 日（月・祝） 15：45～17：15**

### 小・中学校におけるビジョントレーニングのニーズに関する研究
～ 学校におけるさまざまな教育場面での気づきと指導 ～

| | | |
|---|---|---|
| 企画者 | 井阪 幸恵 | 和泉市立国府小学校 |
| 司会者 | 斎藤 富由紀 | 千里金蘭大学 |
| 話題提供者 | 竹本 晴香 | 視機能ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ Joyvision |
| 話題提供者 | 吉田 梨乃 | 東京学芸大学大学院 |
| 話題提供者 | 杉本 陽子 | 飯塚市立飯塚小学校 |
| 指定討論者 | 北出 勝也 | 視機能ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ Joyvision |

# 発達障害に特化した民間クリニックのLDへの取り組みと提言

## ～ 早期発見とその後の”支え”を中心に ～

企 画 者 ： 藤岡 徹 （福井大学/平谷こども発達クリニック）
司 会 者 ： 藤岡 徹 （福井大学/平谷こども発達クリニック）
話題提供者： 石坂 郁代 （北里大学医療衛生学部）
河野 俊寛 （金沢星稜大学）
伊藤 一美 （星槎大学大学院）
山口 大輔 （平谷こども発達クリニック）
指定討論者： 平谷 美智夫 （平谷こども発達クリニック）

【企画の趣旨】

平谷こども発達クリニックは発達障害に特化した民間クリニックである。発達障害全般にであるが、学習障害（LD）への取り組みも多くなされている。たとえば、発達外来を受診する小学生以上の全患者への読み書き評価、LD児への個別・集団指導や支援、スーパーバイザーのスタッフ研修などである。積極的な学会発表も行っており、LD学会においては「特に他の発達障害を併存すると、発達性ディスレクシア（DD）児の学習面での問題は主訴として挙がりにくくなること」「行動面での問題を呈する子どもには学習面での問題が併存しやすいこと」を報告してきた。しかし行動面での問題のみを主訴に来院するLD特性のある子どもがまだ多いのが実状であり、就学前に個別・集団指導を受けていた子どもの中で就学後にLDの診断を受ける子どもが一定数存在する。よって、LDの早期発見/見落とし防止の観点を子どもの臨床に関わる者が持つことは重要だと考えている。

そこで、今回は平谷こども発達クリニックにスーパーバイザーとして招いている読字障害/DD、書字障害、計算障害の専門家に集っていただき、「LD特性のある子どもが幼少期から学童期にかけて家庭や集団場面で示す行動特徴」と「彼らへの“支え”」について解説していただく。さらに、それらに基づいてクリニックが実際に行っている取り組みについてスタッフより報告していただく。さまざまな領域の子どもの臨床に関わる関係者に早期発見/見落とし防止の観点を紹介させてもらい、LDの特性によって困難に直面している子どもたちとその家族の助けになること、そのような特性を持つ子どもたちに生じうる困難を予防できることを願い、このシンポジウムを企画した。

「読みの苦手さの早期発見とその後の支え」　石坂　郁代

幼児は，日常生活の中で文字に接しながら徐々に読む力を育くむが，そのような力をプレリテラシーと呼ぶ。文字に興味を持ち始めると，３歳頃には自分の名前だけは見つけられたり，４～５歳になると絵本の中の文字を何と読むのか聞いたりする。文字と音の結び付けの認知的基礎となる音韻認識は，逆さことばやしりとりなどのことば遊びで培われる。文字認識には，似た形の文字の弁別などができる視知覚認知能力が重要である。これらの点の苦手さや興味のなさは，就学前に読みの苦手さに気づくポイントである。就学後の「読み」は「音読」と「読解」の両面から評価する。「音読」は流暢性と正確性という二側面で評価するが，逐字読みにみられるように流暢性が低下していることが多い。音読の苦手さの様子から，１年生の３学期には読字障害疑いの子どもを抽出することができるとされる（RTIモデル：Response To Intervention， 早期から指導を行い，それに対する反応や結果を見ながら，段階的に読字障害を抽出していく方法論）。一方，読解は文字から情報を得ることであり，音読が苦手でも（黙読で）内容を理解することはできる場合がある。したがって，音読は苦手でもテストの成績は良いという結果が生じる可能性があり，このような子どもは問題に気付かれにくいが，学年が上がるにつれて学習困難をきたす場合も多い。支援は，文字に書かれていることの内容理解（読解）ができることを目標とする。漢字熟語なども積極的に含めながら，語彙力を豊かにして意味を推測できる力をつけるための，長期的な指導が必要である。

「書字困難についての早期発見のポイント、その後の支えと配慮」　　河野　俊寛

書字に困難がある状態とは、正確さ、流暢さ、「読みやすさ（legibility)」に困難があることである。具体的には、鏡文字を書く、特殊音節を正確に表記できない、漢字を正確に書けない（正確さの困難)、他の子どもと同じ速度で書けない（流暢さの困難)、読めないような「汚い字」しか書けない（「読みやすさ」の困難）等々である。正確さと「読みやすさ」の困難はわかりやすい。しかし、流暢さの困難はわかりにくい。特に、「きれいな字」を書いている場合は、字がきれいだから問題がない、とされることが多い。ところが、いくらきれいな字であっても、時間内に一定数の文字を書けない場合は、不十分なノートになってしまったり、テストの制限時間内に解答できなかったりする。その結果として、次第に学習意欲が低下し、学習に遅れが生じることになる。支援は、やる気等の精神的な問題ではなく、書くことそのことに困難がある、ということを認めることが第一歩である。そして、書字の練習に過剰な時間とエネルギーを使うのではなく、代筆やキーボード等の補助代替ツールを活用して、負担のかからないアウトプット方法を併用し、他の子どもと同じペースで学習を進めることができるようにすることが重要である。

「計算のつまずきと早期発見とその後の“支え”」　　伊藤　一美

計算に必要な能力は、幼児期の生活体験を通して獲得される数の概念的な知識に依存している。初期の計算学習に関連しているものには、数の直感的判断(subtizing)、多少判断、計数、数の合成分解などがある。これらの知識の獲得に遅れが見られる場合、計算のつまずきを示すことが予測される。しかし、ことばの遅れに比べ、保育者や保護者は数の知識の獲得の遅れに対して関心が低く、また全く数えることができない子どもはいないため、見過ごされやすい。また、数え誤りは、経験不足やケアレスミスと捉えられてしまうことが多く、見過ごされやすい。幼児期のこのような特徴は、計算のつまずきに気づく１つのポイントである。また１年生に習うたし算・ひき算についても、全く計算できない子どもはいないため、やはり練習不足や努力不足と誤解されやすい。計算は「できる」「できない」という評価では、つまずきをとらえることは難しい。計算はその正確性だけではなく、より複雑な計算(筆算などの位数の多い計算)をこなすための速さ(スピード)と流暢性(スムーズさ)が求められる。そのため、正しく計算できたかという観点だけでなく、計算に使用している方略(count-based 方略／memory-based 方略)による概念的な理解の評価、計算手続きを正しく操作できているかという手続き的な理解の評価が重要である。したがって、支援は計算の誤り方の特徴を明らかにしたうえで、計算の概念的な理解と手続き的な理解に分けた指導が必要である。

「クリニックでの取り組み：個別ケース&集団ケース、研究を中心に」　　山口　大輔

平谷こども発達クリニックでは、医師、言語聴覚士、心理スタッフ、作業療法士等の専門スタッフが、発達障害のある子どもとその養育者に対して幼少期よりフォローを行っている。言語聴覚士の療育では、子どもの認知発達を確認しつつ、音韻認知の課題、形の同定や視写課題、言語面の課題などの読字・書字のレディネス形成も支援に取り入れている。その中で読字・書字に関わる認知能力に弱さが見られ、結果として就学前の段階で読み書きの習得に滞りをみせたり、逐字読みのまま就学する子どもが一定の割合で存在する。そのような子どもには就学後に読字や書字の困難が顕在化しうることを念頭において、就学前より予防的な働きかけを行っている。また、読字書字の困難さが顕在化した子どもへの就学後のフォローについては、個々のニーズに合わせ、個別療育、集団の学習支援教室や支援機器グループのプログラムを提供している。さらに、自閉症や ADHD などの他の障害が合併するケース、知的に境界域のケースにおいても、音韻の弱さを背景要因として読みの困難が出現している場合、読字障害とみなして個々の認知特性や言語発達を考慮に入れた支援を行っている。発表では、事例報告を中心にクリニックでの取り組みを具体的に紹介する。

**キーワード：学習障害，早期発見，早期支援、合理的配慮**